

概して音楽は、本体と広義の装飾、すなわち予め規定されている骨格と音楽を生きたものにするための演奏時の加工・付加から成り立っている。種々の装飾は後者において極めて重要な要素となる。骨格がどのレベルまで規定されているかということや、装飾の具体的な技法や実際の演奏時に認められる加工・付加の自由度などは、音楽の種類や様式、地域や時代等によって異なる。今回東洋音楽の事例として提示するインド音楽は、旋律はラーガという独自の規則にもとづいて作られるが、ラーガは音階構成音や音の進行の大枠が決められているのみで、実際の演奏では演奏家がラーガの規則や情趣に抛りつつも即興的に自由に旋律を組み立てていく。そして聴衆は演奏家がどのようにラーガを加工してその場に相応しい音楽を作っていくかに注目して鑑賞する。ラーガは心を彩るという意であり、インド音楽は後者の自由度が高い音楽といえる。

実例ではシタール奏者の小日向英俊氏が楽器の簡単な解説の後、シタール独奏で約十分間「ラーガ・ヤマン」の即興演奏を行った。ラーガ・ヤマンは北インドのヒンドゥスタニー音楽の代表的なラーガの一つで、ド・レ・ミ・ファ#・ソ・ラ・シの音階からなり、ミ・シが重要な音、シレミ、ファ#ラシなどの進行に特徴がある。北インドのヒンドゥスタニー音楽では、南インドのカルナータカ音楽で定められた 72 種の基本ラーガから 10 種の基本音階を選んでラーガを分類しているという。なおインド音楽では楽譜は用いず、音楽は口伝で傳承されている。（遠藤 徹）